

# 交差するまなざし

2010年11月20日～23日 展示+ワークショップ 旧川越織物市場  
11月23日 アートシンポジウム 川越市立博物館

## 交差するまなざし／子どもの視線 アートの視線

2010年11月20日から23日にかけて、インスタレーション型の展示とアーティストが指導するワークショップで構成された「交差するまなざし／子どもの視線 アートの視線」が開催されました。

今回のインスタレーションの場所は、川越市内の大正浪漫夢通りに近い立門前通りからアプローチする「旧川越織物市場」(木造2階建)です。明治43年に建設された「織物市場」は、かつて織物と人々が行き交う川越の織物文化を支えた場所でした。その建物が今も残る場所で、明治・大正という時代と現代に生きるアーティストたちが交わり、そのイメージがインスタレーションという手法に



よって作品化されました。

アーティストの間地紀以子さん(ファイバーアート)と川越市立鯨井中学校美術部の生徒さんがおこなったワークショップでは回を重ねるうちに、それぞれに信頼関係が生まれ、生徒たちは自分のワンダーランドの実現を目指して作業に打ち込んでいました。また展示やワークショップには他に荒木茉莉さん(日本画)、森田千晶さん(手漉き和紙)、長峰菜穂子さん(陶磁器)、柴崎智香さん(鍛金)が参加しました。

当日、子どもと一緒におこなった「土壁」「手漉き和紙・葉書」「鍛金・キャンドルトレイ」「銀箔ストラップ」のワークショップでは、就学前と小学校低学年の児童の発想の豊かさに目を見張るものがありました。一緒に参加した保護者や一般来場者の方々もそれに負けじと作品づくりに夢中になっていました。

アーティストと子どもは天使なのですね。見えないものが見え、そうあってほしい世の中が見えるようです。心の中の太陽、渡れない橋、鉄の塊の中の薔薇、空から降りてくる花や木の葉、土壁に埋もれたキラキラ星、嘘の中の風景、誰もが手をつなげられる社会……。

アートは場所(風景・地域)と市民、市民と市民、大人と子どもをつなげるツールであることを再確認した展示でした。

草野律子(SMF協力委員)



## 場の記憶

### —あるってアート2010・PETIT—

ふだんは立ち入ることのできない旧川越織物市場を訪れると、ここだけ特別な時間が流れているような感じがします。一見バラック風のボロ家ですが、かつてここに川越の繊維産業の重要な拠点があったことを思いながながめていくと、取り引きに便利なおとくにと長く張り出した庇、整然と区切られた間口、屋根を軽くするために日本で最初に使われた亜鉛の波状鉄板、ぜいたくにも椀の一枚板が嵌め込まれた雨戸など、この建物に懸けられた当時の人々の思いが浮かび上がってきます。

この旧川越織物市場を会場として、「交差するまなざし」をテーマに作品の展示とワークショップがおこなわれましたが、アーティストと子どもたちの視線がどのように交差するのか楽しみでした。ワークショップに参加している子どもたちの視線には、普段ゲーム機で遊んでいる時の目つきとは異なる、何か優しいものに見守られているような安心感が漂っていました。また、アーティストの荒木茉莉さんは、ほこりが積もり、汚れが染みついた室内にインスタレーションをおこない、この空間に流れた長い時間の蓄積を作品の厚みとして付加することに成功し、落ち着いた空気に包まれた空間を出



現させました。

子供たちとアーティストの両者の視線からは、美術館やギャラリーで作品に向けられる一方向から差しこむような視線とは異なり、「場の記憶」というオーラのなかで人々の視線が双方向に行き交い、暖かく安らぎのある空気が醸し出されていたように感じることができました。

このようなサイトスペシフィックなアートの魅力は、その場所に埋もれている歴史、文化、風土といったものを総合した「場の記憶」とアーティストのオブセッションな思いとが作



また、間地紀以子さん(本事業参加アーティスト)は過去に初めておこなった子どもたちの制作から、さまざまな触発を受け、その後多くの共同制作をおこなってきたなかで、子どもとの信頼関係がもっとも重要であるということ、また今回の取り組みは短時間の制作で大変だった分、生徒たちがアーティストとの出会いによって気持ちも活動そのものも進化して、作品「まなざし」ができていった過程が紹介されました。

そして三澤一実さん(武蔵野美術大学教職課程教授)は美術教育の視点から、子どもたちは常にアートを内包していること、現実と非現実を行き来していること、そしてそれをつなぐのがアートであることなどを分かりやすく説明されました。また、学校は子どもを社会化するシステムであるが、このようなワークショップやアートプロジェクトは自己を見つめ、地域を豊かにしていく大切な場として生きている、と今後の展望につながるお話がありました。

参加者からは本事業を通して、「川越の歴史的、文化的な資源を生かしたプロジェクトはとても効果的だ」、「子どもたちの活動の可能性に期待したい」、「旧川越織物市場を川越特有の記憶の空間として活用していくことが必要だ」などの意見が出て、多くの示唆に富む提案がなされました。また、旧織物市場保存会の方からは「ただ保存を訴えるのではなく、このような活用が保存の意識や新たな文化を創っていくことにつながることを発見した」とシンポジウムの意義と本事業の成果を評価していただき、大きな成果がありました。

田中晃(SMF運営委員)



品として表現され、日常では気づくことのできない感動を呼び起こすことができる点にあると思います。

小野寺優元(SMF協力委員)

## アートシンポジウム

11月23日の「アートシンポジウム」では、「アートが人や場をどのようにつなぎ、どんな可能性をもっているのか」について『アーティスト』や『まちづくり活動』、『美術教育』のそれぞれの視点からアートを見つめてみました。短い時間でしたが、三人のパネラーからのたいへん興味深い報告や提案により、参加者自身もアートの力に気づき、変容できた貴重な機会となりました。

草野律子さん(アルテック事務局)からは、前回の「あるってアート2008」の経験やアーティストと子どもたちの共同制作による活動が、人と人、人とモノをつなぐ原動力となることを実感したという報告がありました。